

東京 IPO 特別コラム

2016年10月5日 Vol.52

上場後に形成される株価は混沌としている

10月相場がスタートして3日目となりますが、投資家の皆様はすっきりした青空とはいかずどんよりとした空模様にも似た秋相場をそれなりに楽しまれているものと拝察致しております。また日本に接近中の台風が過ぎれば、いよいよ秋晴れの天気変わるものと予想されますが、相場環境も似たりよったり。混沌とした国内外の諸情勢と政策期待が綱引きとなって展開される秋相場を引き続き楽しんで頂きたいと思います。

およそ3600にも及ぶユニークな上場企業が織りなす日本の株式市場は新たな成長企業を加えながら少しずつ活性化し投資家の資産形成にも貢献していると考えられます。9月は2日にマザーズ市場に上場したベイカレント・コンサルティング(6532)から30日のG-FACTORY(3474)まで10社が上場を果たしました。この中では、医療・介護分野のクラウドサービスを展開するカナミックネットワーク(3939・公開価格3000円・初値8600円・2.87倍)やAI関連のシルバーエッグテクノロジー(3961・公開価格900円・初値2622円・2.91倍)やビッグデータ、セキュリティ関連のチェンジ(3962・公開価格1200円・初値2999円・2.5倍)など公開価格に対していきなり2倍以上で初値が付いた銘柄もあり、テーマ性や将来性を見据えた評価がなされている状況が見られます。

IPO時の株価の関心は、①公開価格に対して初値がいくらでつくか、②初値に対してその後の高値がいくらまで値を上げるのか、③反対にその後いくらまで値を下げるのか、④さらには高値からどの程度まで値を下げるのか、⑤安値からどの程度まで値を戻すのか、⑥継続的に値を上げていく事業内容か、成長力が備わっているか、⑦株価下落トレンド銘柄のリバウンドの可能性はあるのか、などに分けられます。長期で保有しようとする投資家と短期決戦型で臨む投資家によってスタンスや関心事は異なりますが、上場後に形成される株価は押しなべて混沌としたものと言えます。それは投資家によって評価がまちまちであるためだろうと思われれます。多くはIPO後に売り物が少なく需給がタイトな段階ではプレミアムがつきやすく、想定以上の人気を得ることもあります。熱しやすく冷めやすいという投資家の一般的な性質から売られる場合も早いと言うことが言えます。先高感のある間は多くの投資家はその株を保有しようとしませんが、何かのほずみ(例えばテクニカル上の問題)で値下がり傾向が見られると今度は我先に売りを出そうとする短期投資家がいて株価を押し下げることがあります。これぞまさに相場の世界ではありますが、将来性を感じる中長期投資家(特に大口投資家)の目利きがその後の株価動向の行方を左右することになります。

このように取引期間の短いIPOして間もない銘柄の株価形成は混沌としており、経験の浅い投資家はなかなか手が出しにくい世界なのかも知れません。それでも一定の経験を積まれたベテランの投資家にとってはボラティリティの大きなIPO市場でこそキャピタルゲインが得やすいとお考えになっておられるものと推察されます。投資家の皆

東京 IPO 特別コラム

様にとってはこうした混沌とした株価の形成期間を経て、発信されます企業の将来性を示す情報を通じてその成長性やリスクを十分にご理解頂くことが肝要なのかと思われ
ます。

(東京 IPO コラムニスト 松尾範久)